

3課

7月19日

波乱の幕開け



安息日午後 7月12日

暗唱聖句

モーセとアロンは行ってパロに言った、「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭をさせなさい』と」。パロは言った、「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」。(出エジプト記 5 : 1、2、口語訳)

モーセとアロンはファラオのもとに出かけて行き、言った。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒野でわたしのために祭を行わせなさい』と。」ファラオは、「主とは一体何者なのか。どうして、その言うことをわたしが聞いて、イスラエルを去らせねばならないのか。わたしは主など知らないし、イスラエルを去らせはしない」と答えた。(出エジプト記 5 : 1、2、新共同訳)

今週の聖句

出エジプト記 5 : 1～23、黙示録 11 : 8、出エジプト記 6 : 1～13、詩編 73 : 23～26、IIコリント 6 : 16、出エジプト記 6 : 28～7 : 7

今週のテーマ

多くの信者は、神に従うと決心したとき、幸福、繁栄、成功だけを経験すると思っています。しかし、聖書がしばしば示しているように、必ずしもそうではありません。時には、多くの障害や新たな困難があらわれます。それは非常に苛立たしいことであり、必ずしも簡単に答えが見つからない、あるいは、まったく答えが見いだせないように思える難しい問いを生じさせます。

神を信頼する人は、多くの試練に直面するでしょう。しかし、私たちが耐え忍ぶなら、神はご自分の条件とタイミングで解決策をもたらしてください。神の方法は、迅速かつ瞬時の解決を求める私たちの期待とは相容れないかもしれませんが、それでも私たちは神を信頼することを学ばねばなりません。

今週の主題は、モーセと、神の民をエジプトから導き出せという命令です。神からの召しは、明確でした。モーセの使命は容易だったでしょうか。

神の命令に従って、モーセはファラオのもとへ行き、「わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出す」（出3：10）働きを開始します。

問1 「わたしの民を去らせなさい」という神の要求に対するファラオの返事は、どのようなものでしたか（出5：1、2参照）。この返事の中に、どんな意味を見いだすことができますか。

「主とは一体何者なのか」。ファラオは、神を知りたいという願望からではなく、自らが知らないことを認めている神への反抗、あるいは否定として、こう宣言しました。「わたしは主など知らない」と、彼はほとんど誇るかのように言います。

歴史上、どれだけの人が同じことを口にしてきたでしょうか。それは、なんと悲劇的なことでしょうか。イエスご自身が言われたように、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ること」（ヨハ17：3）なのです。

ファラオを王とするエジプトは、神の存在と権威を否定する権力の象徴です。それは、神、神の言葉、神の民と対立する存在なのです。

「イスラエルを去らせはしない」というファラオの次の宣言は、生ける神に対するこの抵抗をさらに明らかにしており、エジプトを神の否定の象徴とするだけでなく、神と戦う態勢の象徴としています。

数千年後のフランス革命で、多くの人と同じ態度を目にしたのも不思議ではありません（イザ30：1～3、黙11：8も参照）。ファラオは、自分を神、または神の子だと思っていました。それは、自分自身の絶大な権力、強さ、知性を信じるという広範な精神を指しています。

「聖書の歴史にあらわれているすべての国々の中で、エジプトほど、生きた神の存在を大胆に否定し、神の命令に抵抗した国はない。また、エジプトの王ほど、天の権威に対して、公然たる横暴な反逆を企てた王はない。モーセが主の名によって、彼に使命を伝えたとき、パロは高慢に答えた。『主とはいったい何者か。わたしがその声に従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない』（出エジプト5：2）。これは無神論である。そして、エジプトにたとえられた国は、同様に、生きた神の要求を拒み、同じような不信と反抗の精神をあらわすのである」（『希望への光』1722、1723ページ、『各時代の争闘』第15章）。

モーセは、主から課されたことが容易ではないと最初からわかっていたはずですが（だからこそ、そこから抜け出そうとしたのです）が、どんなことが起こるのか、おそらく見当もつかなかったことでしょう。

問2 出エジプト記5：3～23を読んでください。記録によると、モーセとアロンがファラオと最初に会った直後、どんな結果になりましたか。

ファラオのもとに行く前に、モーセとアロンは、イスラエルの長老と民を集めて神の言葉を語り、神のしるしを示しました。その結果、イスラエルの人々は、主が奴隷状態から解放してくださると信じ、それゆえ彼らは主を礼拝しました（出4：29～31）。期待は確かに高かったでしょう。ついに、主がヘブライ人を奴隷の境遇から救い出そうとしておられたからです！

こうしてモーセは、神の要求を携えてエジプトの王のもとに行きましたが、イスラエルの人々にとって、事態はさらに悪化しました。彼らの苦しみは増し、日々の労働は、一層面倒で過酷なものになりました。彼らは、怠け者だと非難され、より厳しく扱われ、彼らの苦役は、以前にも増して困難になったのです。

民の指導者たちは不満を抱き、彼らとモーセやアロンとの対立は、醜いものでした。そして、（後述するように）その対立は、モーセがこの先何年にもわたって同胞との間に抱えることになる対立の前兆でした。

問3 出エジプト記5：21を読み、モーセやアロンと^{たいじ}対峙したこの人たちの立場になって、考えてみてください。なぜ彼らはこんなことを言ったのでしょうか。

なぜ彼らがモーセに腹を立てたのかを理解することは、それほど難しくありません（「主があなたたちに現れてお裁きになるよう」と、彼らは言いました）。彼らは、モーセがエジプト人から自分たちを解放するために来たのであって、エジプト人の下での生活を一層苦しくするために来たとは思っていなかったのです。

こうして、モーセとアロンは、エジプト人に対処するだけでなく、自分たちの同胞にも対処しなければなりませんでした。

なんとかかわいそうなモーセでしょうか！ 彼は、まずファラオになじられ、今度は同胞全員からののしられるのです。

そこで、モーセは神に不平をぶつけます。イスラエルの状況が悪化していることへの恨みと失望の中で、彼はこう尋ねました。「わが主よ。あなたはなぜ、この民に災いをくだされるのですか。わたしを遣わされたのは、一体なぜですか。わたしがあなたの御名によって語るため、ファラオのもとに行ってから、彼はますますこの民を苦しめています。それなのに、あなたは御自分の民を全く救い出そうとされません」(出5:22、23)。モーセが主に対して不満を抱えているのは明らかであり、状況を考えれば、当然のことです。

しかし、神の返事は力強いものでした。神は行動されます。しかも、非常に断固たる態度で行動されます。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう」(出6:1)。

問4 出エジプト記5:22～6:8を読んでください。モーセに対する神の返事はどのようなものでしたか。ここにどんな重要な神学的真理が明らかにされていますか。

神は、もはや語られるだけではありません。今やご自分の民のために、力強く介入されます。神はモーセに、次のいくつかの重要な事実を思い出させます。(1) わたしは主である。(2) わたしは族長たちの前にあらわれた。(3) わたしは彼らと契約を立てた。(4) わたしは彼らに、カナンの地を与えると約束した。(5) わたしはイスラエルの子らのうめき声を聞いた。(6) わたしはあなたたちに約束の地を与えるという契約を思い起こした。

「わたし(神)」という言葉の繰り返しに注目してください。**あなたたちの神、主なる「わたし」は、これまでにこれこれのを行ってきたのだから、あなたたちは、「わたし」が約束したことを行うと信じることができる。**

主はイスラエルの生ける主であるがゆえに、今やイスラエルのために四つの偉大なことを行うと厳粛に宣言されます。(1)「わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し」、(2)「奴隷の身分から救い出す」。(3)「腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを^{あがな}う」。(4)「そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」(出6:6、7)。

これら四つの神の行動は、神の民との関係を確かなものとし、再構築します。神はこれらの活動の主体であり、愛のゆえに、これらの賜物を無償で提供されるのです。当時も今も、主は私たちにそうしてくださいます。

主はモーセに、これからしようとしていることについて、力強い約束を確かに与えておられました。神との出会いは、モーセを励ましたに違いありませんが、モーセが同胞から受けた反応を考えると、その励ましは、おそらく長続きしなかったことでしょう。

問5 出エジプト記6：9～13を読んでください。次にどんなことが起きましたか。人生における失望と葛藤の時について、私たちはこの物語から、どんな教訓を得ることができるのでしょうか。

ヘブライ人は、悲しみ、苦しみ、重労働のためにすっかり気力を失い、神が約束されたことを成就するために行動してくださるというモーセの確約の言葉に耳を傾けませんでした。彼らは神の約束の成就を長い間待ち望んでいましたが、その望みがかなわないでいたからです。今になって、なぜ状況が変わるのでしょうか。彼らは落胆し、希望を失いつつありました。おそらく生涯で初めて本当の解放の希望を抱いたので、一層それは苦いものでした。

神の約束を望みながら、それでも同じような状況に陥ったことのない人はいるのでしょうか。落ち込んだり、失望したり、不満を感じたり、さらには、神に見捨てられたとさえ感じたことがない人はいないのではないのでしょうか。

ヨブの話を覚えていますか。詩編記者アサフはどうでしょうか。アサフは、邪悪な者の繁栄と義人の苦しみに関する疑問に悩みました。しかし、その苦悩にかかわらず、最も美しい一つの信仰告白をしています。「あなたがわたしの右の手を取ってくださいるので／常にわたしは御もとにとどまることができる。あなたは御計らいに従ってわたしを導き／後には栄光のうちにわたしを取られるであろう。地上であなたを愛していなければ／天で誰がわたしを助けてくれるでしょうか。わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが／神はとこしえにわたしの心の岩／わたしに与えられた分」(詩編73：23～26)。

聖なる歴史を通じて、神は、ご自分が民とともにいることを民に保証してこられました(イザヤ41：13、マタ28：20)。神は彼らに、平安と慰めを与え、人生の困難を乗り越えられるように、彼らを力づけてくださいます(ヨハ14：27、16：33、フィリ4：6、7)。

「わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」(出6：7)という契約の定型表現は、主がご自分の民との間に築きたいと願われた親密な関係をあらわしています。

問6 出エジプト記6:28～7:7を読んでください。主はモーセの反論に、どう対処されましたか。

神はモーセに、ご自分をヤハウェと紹介なさいました。それは、神が人格を持った親しい神であり、ご自分の民の神であり、彼らと契約関係を結ばれた神であることを意味しています。

この内在的な神が再びモーセに、行ってファラオと話すように命じられました。モーセは自信のなさから、「どうしてファラオがわたしの言うことを聞き入れましょうか」と改めて反論します。ここでもまた、モーセの謙虚さだけでなく、これまでのところあまりうまくいっていない任務から抜け出したいという彼の願いを見ることができます。

「神がモーセに、ファラオのもとへ戻るように命じられたとき、モーセは自己不信を示した。『アラル・セファタイム』という言葉は——直訳すると『割礼のない唇』であり、モーセの話す能力の欠如をあらわすためにここで用いられている（出6:12、30）——、出エジプト記4:10にある『舌の重い者』という言葉に似ている」（『アンドリュース聖書注解——旧約聖書「出エジプト記」』205ページ、英文）。

憐れみ深くも神は、モーセを助けるためにアロンを与えられました。モーセはアロンに話し、続いてアロンが公の場でファラオに話すのです。こうしてモーセは、エジプトの王の前で神の役割を果たし、アロンは彼の預言者となります。

この記事は、預言者の役割について優れた定義を与えてくれます。預言者は神の報道官です。彼または彼女は、神の言葉を人々に伝え、解釈する神の代弁者なのです。モーセがアロンに語り、アロンがそれをファラオに告げたように、神は預言者に意思を伝え、預言者が神の教えを民に告げ知らせます。それは、口頭で直接なされることもありますし、最も一般的になされたように、預言者が神からのメッセージを受け取り、それを書き留めることもあります。

神はまたモーセに、彼がファラオと面会することによって予想されることを説明されました。神は、その対決が緊迫したものとなり、長く続くだろうと警告されます。ファラオはとても頑固になり、心をかたくなにするだろうと、神はモーセに二度目の強調をなさっています（出4:21、7:3）。しかし、結果は良いものになります。なぜなら、「エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる」（出7:5）からです。つまり、これから起こる混乱の中でも、神は栄光を受けられるのです。

参考資料として、『人類のあけぼの』第23章「エジプトの災害」の前半部分を読んでください。

モーセが初めてファラオに近づいたあと、モーセとその同胞がいかにひどい状況に陥ったかに注目してください。

「十分に警戒し始めた王は、イスラエル人が王の仕事に反逆を企てるのではないかと疑った。不満は、怠惰の結果起こった。王は、危険な陰謀を企てる時間が彼らにないようにしなければならなかったと考えた。そこで王は、直ちに彼らの束縛を厳しくし、独立精神を砕く手段に出た。その日、彼らの労働をさらにきつくし、圧迫を加える命令が出された。

エジプトで、最も広く使用された建築の材料は、太陽で焼いたれんがであった。最も壮麗な建物の壁も、このれんがの上に石を貼りつけたものであった。れんがの製造には、多くの奴隷が使用された。粘土のつなぎとして、麦わらを刻んだものが混ぜられていたので、そのために多量の麦わらが必要であった。王は、麦わらの供給をそのときから停止することを命じた。労働者たちは、自分たちでわらを採るとともに、同量のれんがを作ることが厳しく要求された。

この命令は、国内のイスラエル人を非常に困難な状態に陥れた。エジプト人の監督は、ヘブル人の下役を任命し、彼らのもとにある人々の仕事の責任をとらせた。王の要求が実施され、人々は、わらの代わりに刈り株を集めるために、国中に散らばった。しかし、これでは、従来と同量の仕事を完成することは不可能であった。製造が順調に進行しないために、ヘブル人の下役たちは、激しく打たれた」（『希望への光』130ページ、『人類のあけぼの』第23章）。

話し合いための質問

- ① あなたの人生の中で、神の召しを聞き入れたのに、物事がうまくいかなかったとき、あるいは、出だしがうまくいかなかったときのことを思い浮かべてください。時間をかけて、あなたはその経験からどんな教訓を学びましたか。
- ② あなたが神の助けを求めて祈ったとき、あるいは、神の助けを期待していなかったときに、神があなたの人生にいかにか介入してくださったかを、ほかの人に話してください。主を信頼している人にさえ悪いことが起こるとき、私たちはいかにして神の憐れみを信じることができますか。
- ③ 「私は主など知らない」と明言する人に、あなたは何と言いますか。しかし、その人が反抗的な意味ではなく、自分の人生に関する単純な事実としてそう言ったとしたら、どうでしょう。その人が「主を知る」ことを助け、そうすることがなぜ重要なのかを説明するために、あなたは何かができるでしょうか。